

# 埼玉の植物防疫

発行 2018. 9. No.138  
 一般社団法人 埼玉県植物防疫協会  
 さいたま市大宮区北袋町1丁目340番地  
 埼玉県農業共済会館内  
 Tel 048・645・2226 Fax 048・645・2144

目 次		頁
試験研究情報		
根深ネギに発生する病害虫とその現状	……………埼玉県農業技術研究センター	1
ヒサカキワタフキコナジラミの発生活消長を解明するための取組について(2018)	……………埼玉県茶業研究所	5
協会だより……………		7
平成30年度農薬展示は現地設置状況		
果樹加害・外来カミキリムシ早期発見を「農業共済新聞掲載記事」……………		11

## 根深ネギに発生する病害虫とその現状

埼玉県農業技術研究センター 宇賀博之

### 1 はじめに

埼玉県における根深ネギの作付面積は2,440ha(平成28年産作物統計)であり、野菜の中では1位である。作型は多様であるが、初夏に定植して秋冬に収穫する秋冬ネギが1,970haと8割を占めている。いずれも栽培期間が長期にわたることもあり、被害を及ぼす病害虫は多種多様である。

### 2 虫害

#### (1) 主要害虫のネギアザミウマについて

作付けの多い秋冬どりについてみると、地上部の虫害では育苗段階から初冬まで発生がつづくネギアザミウマ(図1)が第一にあげられる。本種の発生活消長は越冬した成虫やその次世代が飛来して定着、増殖し、6月頃に1回目のピークを迎える。梅雨時における降雨によってその発生は一時的に減少するが、8月頃に再度発生量が多くなる。秋から寒くなるにつれて減少に向かうが、この時期の気温が高く、また、降雨が少ない場合は12月になっても被害を及ぼす程度の発生がみられる場合がある。このように、本作型ではほぼ全栽培期間に発生がみられるため対策が必要となる。根深ネギはかなり広い面積に作付され、また、一般



図1 ネギアザミウマ成幼虫と食害痕  
 右上に成虫、左下に幼虫が寄生、  
 白くかすれているのが食害痕、黒  
 い斑点は虫糞

にネギ族植物は比較的虫を忌避する効果もあるため、生物相が単調となりやすい。薬剤による防除が主流となるが、多数の薬剤に対して抵抗性を獲得した個体群も多い。一方で、非選択制殺虫剤を用いた場合、天敵などの益虫もすべて殺してしまう。このような状況の中、ネギアザミウマの増殖率は高く、雌成虫は100以上産卵し、1世代に要する期間は25℃で17日程度と早いことから、近隣からの成虫の飛び込みが多ければ爆発的に増殖する(リサージェンス)。また、ネギのみならず、

ブロッコリーやキャベツなどのアブラナ科、キュウリなどのウリ科、ナスなどナス科植物でも増殖するため、多くの作物の重要害虫となりつつある。近年では、ネギ栽培に限ったことではないが、「殺虫から制虫へ」という言葉の通り、無ではなく被害が出ない程度に抑制できればよいと言うように、うまく付き合っていく方向へと意識が変わりつつある。

## (2) ネギアザミウマ以外の地上部害虫について

定植直後のネギを加害するため欠株を招くネキリ虫類、幼苗期に多発すると生育に影響を及ぼしやすいネギハモグリバエ(図2)、初夏～初秋にかけて発生が見られるシロイチモジヨトウ、夏から初秋にかけてはハスモンヨトウ(図3)などが少なからず被害をもたらす。このチョウ目害虫は地域により発生量が大幅に異なり、特にシロイチモジヨトウは東部地域での発生は非常に少ない。ネギコガや春先に多いネギアブラムシも発生がみられるが、他の害虫と比較するとその被害は小さいと思われる。センター内のネギほ場では、環境省のカテゴリでは準絶滅危惧種で関東地域では非常に減少しているマエアカヒトリ(図4)が毎年発生し、本年は6月と8月の2回にわたり多発生となった。



図2 ネギハモグリバエ成虫



図3 ハスモンヨトウ幼虫



図4 マエアカヒトリ幼虫

## (3) 地下部の害虫について

ロビンネダニ(図5)を主とするネダニ類があげられる。体長は通常1mm以下と小さく、卵から成虫までの期間は20~30℃では2週間程度と短く、また、雌成虫は100個程度、多い場合は500個以上産卵することもある。乾燥には比較的弱いとされるが、実験的には5日間の完全絶食にも耐え、環境条件が悪化するとヒポプスと呼ばれる非常に耐久性の高い第2若虫世代が現れる。ネギほ場では根部や根圏土壌にも生息するが、その多くは地下部葉梢の外葉から1,2枚内側に寄生する個体が多く、この場合、ほ場が相当乾燥状態となっても問題なく生存できる環境となっているようである。密度が高いほ場に苗を定植した場合、1,2か月後にはネギ5株と根圏土壌300g中に500頭前後も生息する場合があるため、寄生が多いとネギは生育不良(図6)となり、幼苗期では枯死することもある。ほ場全面が生育不良となることはほとんどないと思われるが、坪枯れ状になることも珍しくない。定植前の処理剤はいくつか登録があるが、生育期に処理できる薬剤はごく最近までなかったが、現時点ではブロフェジン水和剤(フロアブル)が登録されている。現在、効果のある薬剤がいくつか登録に向けて試験されており、近い将来、選択肢は増えそうである。また、耕種的な手法でネダニの密度を低減させる技術について現在検討を行っている。



図5 ロビンネダニ成虫(左写真)  
ほ場における被害(右写真)  
右写真では特に手前の畝の被害が激しく、  
右奥側は薬剤による効果が現れている。



図6 ネダニによる被害と思われる現地ほ場

### 3 病害

#### (1) 地上部の病害について

べと病や黒斑病、葉枯病などが常発するほか、年次によってはさび病や黄斑病の発生もしばしば多くみられる。これらについては、薬剤による防除が基幹となる。明確な因果関係は明らかでないが、ネギアザミウマなどの害虫の食害部分では病原菌の感染リスクが高まるものと思われる。また、ネギアザミウマが媒介するアイリスイエロースポットウイルス (IYSV) による斑点病 (図7) が多発傾向にある。一般的なウイルス病はひとたび感染すると全身に症状が現れ、減収を伴った生育不良を引き起こし、ネギにおいてもアブラムシが媒介するこのようなウイルス病は数種類あるが、近年では、その発生はさほど多くないと思われる。ネギにおけるIYSVによる被害は、ウイルスを獲得したネギアザミウマによる食害部分だけに病斑が現れるため、出荷時に残る葉や葉梢部分にその症状がなければ、多少の発生は看過しても問題はなさそうである。



図7 IYSVによるえそ症状



図8 黒腐菌核病による被害  
出荷基準に調整しても症状が残っているため販売できない

#### (2) 地下部の病害について

細菌病 (バクテリア) と糸状菌 (カビ) に起因するものに大別される。細菌病には軟腐病があり、初夏から秋にかけての比較的高温時に発生がみられる。本病原菌は土壤中に生息し、罹病植物残さが感染源となる。また、多くの作物や花きに感染する多犯性であるため注意が必要である。過去の発生ほ場における対策としては、水はけをよくするなどの耕種的手法とともに、薬剤による予防が大切となる。一方、糸状菌病には、夏季の高温時に発生がみられる白絹病と冬期から初春の低温時に発病する黒腐菌核病 (図8) に注意が必要である。いずれの病害も年次変動はあるものの広く発生する。両病原菌とも菌核と呼ばれる耐久体が土壤中に残ることによって翌年の感染源となり、適度の湿潤条件で発生が助長される。本年は夏季の降雨は比較的少なかったものの梅雨明けが早く、その後に高温が続いたことから、白絹病の発生が例年より多くみられ、その被害程度も高かった。通常、白絹病で枯死まで至ることはまれであると思われるが、本年はそのような株も見受けられた。



黒腐菌核病は比較的低温期に発生する病害であり、厳寒期を除く年末から4月くらいまでがその発病時期である。秋冬ネギでは地温が20℃を下回るようになる9月中旬ごろから根圏にある菌核がネギの臭い成分に反応して発芽し感染する。このころの病気の進展は緩慢で、地上部はもちろん、抜き取って観察してもその感染の有無を判断することは難しい。気象条件にもよるが、早い場合だと11月下旬くらいには盤茎部が飴色に変色(図9)するなどの症状が見られるようになり、やがて外葉が黄化し始め、地上部からでも確認できるようになる(図10)。このころに適度な降雨があると被害が急速に拡大する。末期には土壤中の葉梢部に菌糸が蔓延(図11)して菌核が多数形成され(図12)株は枯死に至る。このような発病株を放置しておくると翌年の感染源の菌核密度が高くなるため、できるだけ場外に持ち出すことが望ましい。本病害はニラやタマネギ、ユリなどのネギ属の作物に感染する。ネギ栽培では隣接する株の間隔が非常に近いため、菌核の発芽によっておこる1次的な感染より発病した株から隣接した株への2次的な感染によって被害が拡大するため、多作物と比較するとほ場に残存する菌核が少ない場合でも注意が必要である。本病害は、土壌pHが高いとその発病が抑制される傾向にあるため、土寄せ時前に石灰窒素などを投入してpHを7以上に保つことで被害が軽減できる。両病害とも、耕種的防除法としては淡水による菌核の不活性化があるが、このような対策を講じることができるほ場は限られる。黒腐菌核病については、現在、薬剤や太陽熱などによる作付け前の土壌消毒とともに、土壌改良資材の投入による被害軽減技術の開発や新規薬剤の登録にむけて試験を行っているところである。



図9 黒腐菌核病の盤茎部病徴



図10 黒腐菌核病の発病程度別写真  
左端は健全株で右にいくほど重症株  
左から3株目ではすでに外葉が黄化している



図11 黒腐菌核病の発病株  
灰白色の綿状のものは菌糸、黒色の粒は菌核

# ヒサカキワタフキコナジラミの発消長等を 解明するための取組について(2018)

埼玉県茶業研究所 工藤 健

## 1 はじめに

平成27年3月に埼玉県茶業研究所内ほ場にて茶の新害虫ヒサカキワタフキコナジラミ（以下「ワタコナ」という。）が確認され、同年10月病害虫防除所から特殊報として公表された。

今年度は二番茶生育期以降の発消長の把握、被覆処理下での発生様態について調査を行い、平成28年度以降のデータをまとめた。

なお、発見の経緯や生態等の詳細については「茶業技術第59号」（埼玉県茶業技術協会発行）の小俣良介氏の報文を参照されたい。

## 2 発消長の把握

### ア 平成28年度

#### (1) 調査方法

平成28年8月1日～11月21日にかけて、埼玉県茶業研究所作況調査園（以下「作況園」という。）に2か所ポールを立て、樹冠面及び株内（地上20～30cm）に黄色粘着板（約10cm四方）を設置した。粘着板は原則、月・水・金曜日に交換し、誘殺した各部位のワタコナ成虫数を集計した。

#### (2) 結果

株内では8月下旬から始まるピークと9月下旬から始まるピークが認められた（図1）。しかし、調査開始時（8月1日）には8月下旬、9月下旬より大きなピークが認められており、7月下旬～8月上旬に多発生することが推測された。一方、樹冠面では調査期間を通してほとんど発生しなかった。各部位に対するワタコナ誘殺数の割合は樹冠面が2.5%、株内が97.5%であった（表1）。

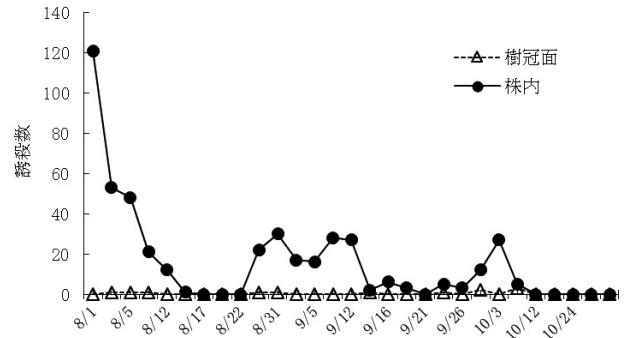


図1 平成28年度 発消長(8月1日～11月21日)

表1 平成28年度 樹冠面及び株内の誘殺数比較

	総誘殺数	誘殺割合
樹冠面	12	2.5%
株内	459	97.5%

### イ 平成30年度

#### (1) 調査方法

誘殺・集計方法に関しては平成28年度と同様な方法で実施した。

調査期間は平成30年6月8日からとし、本稿では9月5日現在までの結果を報告する。

#### (2) 結果

株内では6月中旬～7月下旬にかけてピークが認められたが、8月以降ほとんど発生しなかった。一方、樹冠面では調査期間を通してほとんど発生しなかった（図2）。また、各部位に対するワタコナ誘殺数の割合は樹冠面が5.8%、株内が94.2%であった（表2）。

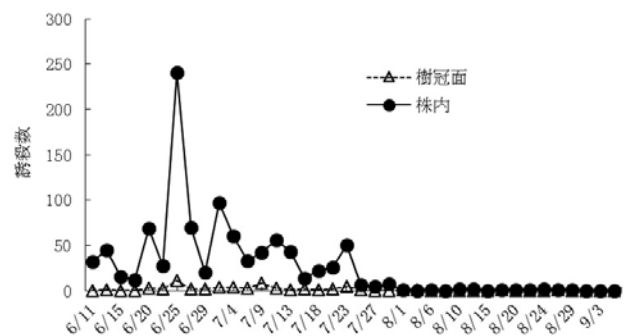


図2 平成30年度 発消長(6月8日～9月5日)

表2 平成30年度 樹冠面及び株内の誘殺数比較

	総誘殺数	誘殺割合
樹冠面	211	5.8%
株内	3424	94.2%

ウ 平成28年度と平成30年度のまとめ

各部位に対する誘殺数は調査を実施した両年とも株内の方が樹冠面より多かった。しかし、発生消長については平成28年度に認められたピークは平成30年度に確認できず、両年は一致しなかった。

### 3 被覆処理による発生の把握

株内の発生量が多いことから、被覆処理により樹冠面への寄生が認められるかについて調査した。

ア 平成28年度

#### (1) 調査方法

異なる2種の被覆期間における株内及び樹冠面の幼虫の寄生を調査した。被覆資材はワイドスクリーン(遮光率85%前後)を用い、被覆期間は短期被覆処理12日間(平成28年5月2日~13日)及び長期被覆処理49日間(平成28年6月1日~7月19日)の2処理とし両処理とも直がけで行い、さらにそれぞれ一重被覆・二重被覆の処理区を設けた。調査項目は樹冠面寄生数(0.5m<sup>2</sup>枠内10か所の幼虫数)及び株内寄生率(20株中の幼虫寄生率)とし、それぞれ被覆期間終了時に無被覆区とともに調査した。

#### (2) 結果

短期被覆処理ではいずれの処理区においても樹冠面の寄生は認められず、株内における寄生率に

も大きな差はなかった(表3)。一方、長期被覆処理では無被覆と被覆処理(一重、二重)間で樹冠面寄生数に差が認められ、被覆処理下においては寄生数が増加し二重被覆処理によってさらに寄生数が増える傾向が認められた。しかし、株内では寄生率に大きな差はなかった。

表3 平成28年度 短期・長期被覆処理における樹冠面寄生総数及び株内寄生率

	短期被覆			長期被覆		
	無被覆	一重被覆	二重被覆	無被覆	一重被覆	二重被覆
樹冠面 総数 (頭)	0	0	0	16	1848	2399
株内 寄生率 (%)	73.3	98.3	83.3	78.3	96.7	98.3

イ 平成30年度

#### (1) 調査方法

発生消長の把握調査で設置した2か所のポールのうち1か所で被覆処理を行った。被覆資材はダイオネット(遮光率90~95%)を用い、被覆期間は短期被覆処理14日間(平成30年6月27日~7月11日)としトンネル被覆を行った。調査項目及び集計方法は発生消長の把握と同様に行った。

#### (2) 結果

被覆処理に伴う樹冠面の発生量増加は認められず、発生総数においても大きな差はなかった(表4)。

表4 平成30年度 被覆の有無による部位別誘殺数

	被覆				無被覆			
	樹冠面	株内	総数	樹冠面の割合(%)	樹冠面	株内	総数	樹冠面の割合(%)
6/27-29	8	148	156	5.1%	4	40	44	9.1%
6/29-7/2	1	107	108	0.9%	8	195	203	3.9%
7/2-4	2	163	165	1.2%	8	122	130	6.2%
7/4-6	7	54	61	11.5%	6	67	73	8.2%
7/6-9	9	96	105	8.6%	17	85	102	16.7%
7/9-11	5	102	107	4.7%	6	112	118	5.1%
合計	32	670	702	4.6%	49	621	670	7.3%

ウ 平成28年度と平成30年度のまとめ

2週間程度の被覆処理では樹冠面での幼虫及び成虫の発生量増加は認められなかった。栽培上あまり現実的ではないが、長期被覆処理(49日間)を行うと樹冠面においても発生量が増加する可能性がある。

30cm)に黄色粘着板(約10cm四方)を設置しワタコナの発生量を調査した。株内の発生量が多い傾向であることは認められたが、他害虫のような決まった発生消長は把握できなかった。また、被覆処理による株内から樹冠面への移行を調査した結果、2週間程度の被覆処理では樹冠面での増加が認められなかった。なお、ワタコナによる実害は現在のところ確認されていない。

#### 4 摘要

平成28年度から樹冠面及び株内(地上20～

### 協会だより

#### 平成30年度農薬展示ほ現地設置状況

地域で問題となっている病虫害及び雑草について、使用方法・使用時期・薬剤の効果の確認のため現地の要望に基づき農薬展示ほを設置しました。展示・設置につきましては、各農林振興センター及び農業共済組合の御協力により下記のとおりです。これらの展示結果は成績検討会後、成績書にまとめ関係各位の参考に供します。

#### ○病虫害防除剤

対象作物名	対象病虫害名	薬剤名	農薬メーカー名	展示場所	実施予定月
水稲	いもち病 紋枯病	オリブライト250G	クミアイ化学工業(株)	熊谷市	6月
水稲	いもち病 紋枯病	オリブライト250G	クミアイ化学工業(株)	川越市	7～8月
水稲 (湛水直播)	いもち病 紋枯病	オリブライト250G	クミアイ化学工業(株)	富士見市	7月
水稲	いもち病 紋枯病	オリブライト250G	クミアイ化学工業(株)	深谷市	6～11月 (8月散布)
水稲	苗立枯病 ムレ苗防止	ナエファインフロアブル	クミアイ化学工業(株)	羽生市	5月
水稲 (育苗箱)	苗立枯病(3種) ムレ苗	ナエファインフロアブル	クミアイ化学工業(株)	春日部市	4月
水稲 (育苗箱)	いもち病 イネドロオイムシ イネミズゾウムシ	Dr.オリゼパディート粒剤	オリゼメート普及会 (北興化学工業(株))	小鹿野町	5月下旬 ～7月下旬
水稲 (箱育苗)	いもち病 イネドロオイムシ イネミズゾウムシ	Dr.オリゼパディート粒剤	オリゼメート普及会 (北興化学工業(株))	寄居町	6月
水稲 (高密度植苗)	いもち病 イネドロオイムシ	Dr.オリゼパディート粒剤	オリゼメート普及会 (北興化学工業(株))	秩父市	5月下旬 ～7月下旬

対象作物名	対象病害虫名	薬剤名	農薬メーカー名	展示場所	実施予定月
水稲 (高密度苗)	いもち病	Dr.オリゼパディート粒剤	オリゼメート普及会 (北興化学工業(株))	熊谷市	6月散布
水稲	いもち病 カメムシ類 ウンカ類	トライK/ トライトラムフロアブル	トライ普及会 (Meiji Seikaファルマ(株))	小鹿野町	7月下旬 ~9月上旬
水稲	いもち病 カメムシ類	トライK/ トライトラムフロアブル	トライ普及会 (Meiji Seikaファルマ(株))	本庄市	8月中旬
水稲 (育苗箱)	フタオビコヤガ等	バズ顆粒水和剤	クミアイ化学工業(株)	春日部市	4月
カンショ	コガネムシ類 トビイロヒョウタン ンゾウムシ	ダントツ粒剤	協友アグリ(株)	北本市	5月
カンショ	コガネムシ類 トビイロヒョウタン ンゾウムシ	ダントツ粒剤	協友アグリ(株)	川越市	5月~
カンショ	ネコブセンチュウ	ネマクリーン粒剤 ビーラム粒剤	日本農薬(株)	川越市	5月~
カンショ	ネコブセンチュウ	ネマクリーン粒剤 ビーラム粒剤	日本農薬(株)	三芳町	5月~
キュウリ	コナジラミ類	トランスフォームフロアブル	ダウ・ アグロサイエンス日本(株)	本庄市	8月下旬
トマト	すすかび病 葉かび病 うどんこ病	ネクスターフロアブル	日産化学(株)	川島町	5月
イチゴ	うどんこ病	ショウチノスケフロアブル	OATアグリオ(株)	越谷市	11~12月
イチゴ	うどんこ病	オルフィンフロアブル	バイエルクロップ サイエンス(株)	吉見町	4~5月 or 10~11月
イチゴ	うどんこ病	オルフィンフロアブル	バイエルクロップ サイエンス(株)	上里町	9~10月 or 3月
イチゴ	うどんこ病	オルフィンフロアブル	バイエルクロップ サイエンス(株)	熊谷市	9~10月
イチゴ	うどんこ病	オルフィンフロアブル	バイエルクロップ サイエンス(株)	杉戸町	11~12月
イチゴ	アザミウマ類	ファインセーブ	Meiji Seikaファルマ(株)	久喜市	3月上旬
ハウレンソウ	ハウレンソウケナ ガコナダニ	フォース粒剤	シンジェンタジャパン(株)	川越市	2月
ネギ	黒腐菌核病	セイビアーフロアブル20	シンジェンタジャパン(株)	深谷市	10月頃
ネギ	黒腐菌核病	セイビアーフロアブル20	シンジェンタジャパン(株)	松伏町	2~3月



対象作物名	対象病害虫名	薬剤名	農薬メーカー名	展示場所	実施予定月
ネギ	アザミウマ類 ハモグリバエ類	ミネクトデュオ粒剤	シンジェンタジャパン(株)	川越市	5月～
ネギ	アザミウマ類 ハモグリバエ類	ミネクトデュオ粒剤	シンジェンタジャパン(株)	深谷市	5月
ネギ	アザミウマ類 ハモグリバエ類	ミネクトデュオ粒剤	シンジェンタジャパン(株)	越谷市	5～6月
ネギ	クロバネキノコバエ類	カスケード乳剤	BASFジャパン(株)	深谷市	7～9月
ネギ	アザミウマ類	ファインセーブ	Meiji Seikaファルマ(株)	越谷市	7月
コマツナ	コナガ	プレオフロアブル	協友アグリ(株)	さいたま市	7月
コマツナ	コナガ	プレオフロアブル	協友アグリ(株)	三郷市	6月
ブロッコリー	黒すす病	アミスター20フロアブル	シンジェンタジャパン(株)	本庄市	9月
ブロッコリー	黒すす病	アミスター20フロアブル	シンジェンタジャパン(株)	深谷市	8～10月
ブロッコリー	花蕾腐敗病	マイコシールド	サンケイ化学(株)	深谷市	8～10月
ブロッコリー	花蕾腐敗病	マイコシールド	サンケイ化学(株)	加須市	9月
クワイ	アブラムシ類	ダントツ粒剤	協友アグリ(株)	さいたま市	8月
ナシ	黒星病 輪紋病	ネクスターフロアブル	日産化学(株)	神川町	7月上旬
ナシ	うどんこ病	ネクスターフロアブル	日産化学(株)	久喜市	9月上旬
日本ナシ	クワコナカイガラムシ	トランスフォームフロアブル	ダウ・アグロサイエンス日本(株)	上里町	5～7月
日本ナシ	クワコナカイガラムシ	トランスフォームフロアブル	ダウ・アグロサイエンス日本(株)	久喜市	4月下旬～ 5月上旬
日本ナシ	ユキヤナギアブラムシ	トランスフォームフロアブル	ダウ・アグロサイエンス日本(株)	久喜市	4月下旬～ 5月上旬
イチジク	カミキリムシ類	ロビンフード	住友化学(株)	川島町	4～5月
イチジク	カミキリムシ類	ロビンフード	住友化学(株)	加須市	4～7月

○雑草防除剤

対象作物名	対象雑草名	農薬名	農薬メーカー名	展示場所	実施予定月
移植水稻	クログワイ オモダカ ノビエ 等	アトトリ豆つぶ250	クミアイ化学工業(株)	上里町	8月上旬
移植水稻	クログワイ オモダカ ノビエ 等	アトトリ豆つぶ250	クミアイ化学工業(株)	川越市	6月上旬
移植水稻	クログワイ オモダカ ノビエ等	アトトリ豆つぶ250	クミアイ化学工業(株)	熊谷市	6月
移植水稻	クログワイ オモダカ ノビエ等	アトトリ豆つぶ250	クミアイ化学工業(株)	宮代町	5月25日
移植水稻	藻類・アオミドロ	キクトモ1キロ粒剤	クミアイ化学工業(株)	富士見市	5月
移植水稻	水田一年生雑草 アオミドロ・藻類 による表層はく離	キクトモ1キロ粒剤	クミアイ化学工業(株)	羽生市	5月
移植水稻	水田一年生雑草 アミドロ、藻類	キクトモ1キロ粒剤	クミアイ化学工業(株)	熊谷市	5月
移植水稻	水田一年生雑草	ビンワンジャンボ	北興化学工業(株)	熊谷市	6～8月
移植水稻	1年生雑草	ビンワン1キロ粒剤	北興化学工業(株)	鴻巣市 (川里)	6月10日
移植水稻	水田一年生雑草	アトカラSジャンボMX	三井化学アグロ(株)	上里町	8月上旬
移植水稻	1年生雑草	アトカラSジャンボMX/ セカンドショットSジャンボMX	三井化学アグロ(株)	加須市	5月25日

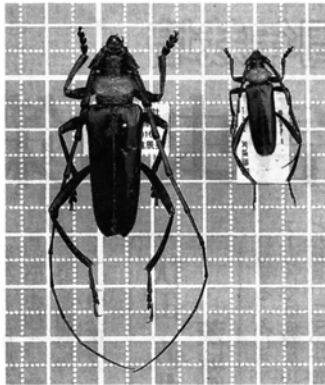
# 果樹加害・外来カミキリムシ早期発見を「農業共済新聞掲載記事」

(第3種郵便物認可)

2018年(平成30年)6月13日

第3225号

クビアカツヤカミキリの成虫。大型個体<sup>37mm</sup>(左)と小型個体<sup>20mm</sup>(右)



## 果樹加害 外来カミキリムシ 早期発見を

埼玉県

【埼玉支局】埼玉県内でクビアカツヤカミキリによる被害が多発しています。今後、果樹への被害も懸念されますので、早期発見と適切な防除が求められます。そこで埼玉県植物防疫協会に対策方法などを紹介してもらいます。

### 大型で胸部が赤色

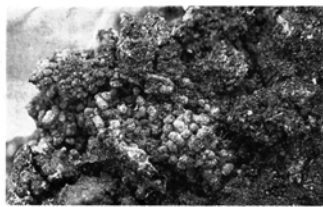
クビアカツヤカミキリの国内での記録は、2011年に深谷市内で成虫1個体の採集から始まります。12年には愛知県のウメとサクラ、13年は埼玉県草加市でサクラ、15・17年に群馬県と東京都・大阪府・徳島県・栃木県を加えた7都府県でスモモ・モモ、ウメ、サクラでの被害が確認されています。本種は大型のカミキリムシで、胸部が赤色なので、他種との判別が容易です。中国とその周辺国と地域に分布し、中国の果樹害虫書籍には、ナシ被害の記述もあり、今後の農業被害の拡大が懸念されます。国内初記録の11年にはト

### スモモ、モモ、ウメで被害

イツ、12年にイタリアで発生が確認されました。08年には米国と英国の港湾で成体が検疫で検出されており、世界各地で同時多発的に分布拡大(侵入)をした様相です。関東では、幼虫被害により群馬県館林市周辺のサクラが枯死、埼玉県行田市内では枝枯れが確認されました。内陸部で顕著な被害が生じていることから、この地域は侵入後の時間がかなり経過した可能性があります。埼玉県内の被害地域は、県北の深谷市から加須市にかけての利根川隣接地域と草加市、越谷市ですが、今後、被害地域の拡大が懸念

### 成虫捕殺や農薬で防除を

されます。クビアカツヤカミキリは、18年1月に特定外来生物(外来生物法)に指定されました。このため、生き残った個体の保管、運搬などが原則禁止となります。一方、害虫防除の観点から捕殺や薬剤処理をすべ



5月に行田市で撮影された幼虫によるサクラ被害樹。糞などの排出は盛夏から秋に増加し、細いカレントウ状になる。と、何の問題もありません。防除法として、積極的な成虫捕殺や幼虫が生息する被害樹の糞排出孔からの針金などの刺殺、樹幹内薬剤噴霧、糸状菌に感染させる成虫発生初期の薬剤処理があります。なお、早期発見、被害防止の観点から、本種の発生が疑われる果樹被害を確認した場合は県内農林関係機関に、サクラ被害は市町村などの樹木管理者に速やかに連絡してください。



**NOSAI**  
公益社団法人  
全国農業共済協会

〒102-8411  
東京都千代田区一番町19番地  
購読 ☎03-3263-6413  
編集 ☎03-3263-6727  
月4回・水曜日発行  
©全国農業共済協会2018  
<http://www.nosai.or.jp/>

首都圏 10

## 首都圏版



